文芸による2021
名古屋の魅力推進事業
公式コトノハなごや 検索

公式SNS・・・#公式コトノハなごや
YouTube・・・kotonohanagoya.jp

コトノハなごや

KOTONOHA NAGOYA©

開催報告２０２１
－２０２１REPORT－

Photo by YUHEI MIYATA

【問合せ・事務局】名古屋市観光文化交流局文化振興室内
〒４６０－８５０８　名古屋市中区三の丸３丁目１番１号 TEL０５２－９７２－３１７２
【　主 催　】文芸による名古屋の魅力推進事業実行委員会
（構成団体｜名古屋市、公益財団法人名古屋市文化振興事業団、愛知淑徳大学、文化のみち二葉館）
【　協 力　】ステキコンテンツ合同会社（小説投稿サイト「ステキブンゲイ」）、愛知淑徳大学

公式note
https://note.com/kotonohanagoya/

公式ウェブサイト
https://kotonohanagoya.webnode.jp/

コトノハなごや

KOTONOHA NAGOYA©

開催報告2021

2021REPORT

目次

2　募集要項、課題写真、賞
3　入賞・入選一覧
4　選考委員コメント、写真提供
5　金賞作品
6　銀賞作品
8　佳作作品
10　入選作品
25　最終選考会、コトノハなごやサロンーオンラインー
26　メディア掲載・広報普及活動
27　制作物
28　開催概要、スケジュール
29　募集結果データ

募集要項

「日常のなごや」の課題写真A～Cの３枚のうちから１枚を選び、その写真から"名古屋を感じられる"掌編小説などの文芸作品を創作すること。

●応募資格　名古屋市在住、在勤、在学の方、または名古屋を訪れたことのある方。

●創作規定　(1)本文が２００字以上８００字以内で日本語・自作未発表の作品。
(2)１人２作品まで応募可。但し同じ写真で複数の応募は不可。
※応募時点で著作権などの全ての権利が応募者に帰属する作品。
※合作や共作は不可。

●創作アイテム　公式ウェブサイトからの応募を推奨。郵送受付も可。

●公式ウェブサイト　https://kotonohanagoya.webnode.jp/

課題写真

A.金時計

B.名古屋市科学館周辺

C.鶴舞公園

賞

・コトノハなごや金賞　（１作品）…賞状と副賞５万円
・コトノハなごや銀賞　（２作品）…賞状と副賞３万円
・コトノハなごや佳作　（２作品）…賞状と副賞図書カード5,000円分

入賞・入選一覧

※入選は以下２０作品　※入賞はマークのあるもの　※表記は応募受付順

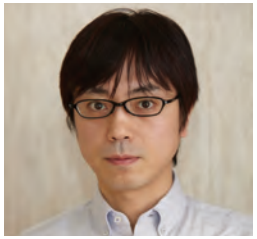
作品タイトル	作者名
彼女と歩くのは	麻倉トコ
手羽先と渋滞	七寒六温
幻のアゲハ	もりくりす
雨宿りの日	水色のうさぎ
金時計ダッシュ	百
宇宙人、侵略	クサカベ　アキラ
時計のところで	白井彩子
噴水塔の下で	佳加
美術の宿題やってねえ!	浅葱
繕う時間	三毛三子
直進	村田選手
待ち人来たらず	水玉猫
「色のある街」	鈴木龍太郎
金時計の怪鳥	さくら木洋介
鶴舞公園、いいとこだよな	しば福
未来の会話	霜月彩華
わたしと宇宙のはなし	いぬちゃん
先輩止まってください!	上石貴仁
駅の時計で待ち合わせ	夏暮 コマ
亡き夫に感謝	加藤淑翠

選考委員コメント

みんな金時計と銀時計を間違えすぎだよな、というのが予選作を読んでみての一番の感想でしたけど、それなりにみなさん面白いところを突いて書かれていたので、楽しんで読むことができました。
これは凄いという突出したものではなかったんですけど、でもある程度の水準で読ませてくれるものがいくつかあったなと思います。

１９５９年、名古屋生まれ。名古屋工業大学卒業。１９８１年「帰郷」が星新一ショートショートコンテスト優秀作に選ばれ、１９９０年『僕の殺人』で長編デビュー。２００５年『黄金蝶ひとり』でうつのみやこども賞受賞。２０１７年『名古屋駅西　喫茶ユトリロ』で日本ど真ん中書店大賞第三位。著書は他に『新宿少年探偵団』『奇談蒐集家』『ミステリなふたり』『麻倉玲一は信頼できない語り手』他、多数。

太田忠司　Tadashi Ohta
/作家



書くということから生まれる気付きや知見は、とても多いと思う。写真を見て、物語を想像して、それを決められた枚数にまとめるという、気軽に参加できるが奥の深いこのコンクールに関わってくれた方々に、まずはお礼を言いたい。最終選考に残った二十作品を読んだが、きちんとオチをつけたり、どんでん返しを入れたり、という作品が多くて感心してしまった。オチをつける、というのは簡単な言葉だけど、驚きや気持ち良さとともに伝わったことは、深い共感や理解を獲得する。短い文章のなかで、このことに挑戦しているのは、とても素晴らしいと思った。

岐阜県大垣市生。２００２年『リレキショ』にて第３９回文藝賞を受賞しデビュー。続く『夏休み』、『ぐるぐるまわるすべり台』は芥川賞候補となる。ベストセラーとなった『１００回泣くこと』ほか、『デビクロくんの恋と魔法』、『トリガール！』等、映像化作品多数。アプリゲームがユーザー数全世界２０００万人を突破したメディアミックスプロジェクト『BanG Dream!』のストーリー原案・作詞等幅広く手掛けており、若者への影響力も大きい。

中村　航　Kou Nakamura
/作家

書くこと自体をすごく楽しんでいらっしゃることが伝わる作品が多いと感じました。課題の3枚の写真に映っている風景は、いずれも私のよく知る生活圏だったため、選考では、文章によって、馴染みの場所のイメージが、どれくらい広がるかというところに着目しました。オチがしっかりついた、意外な結末で終わる作品も多く、面白かったです。興味深かったのは、太田先生もおっしゃったように、最終選考の20作の中だけでも、作品の核となる部分が重なっている作品が、これだけあったこと。それはつまり、名古屋の風景、例えば名古屋駅の金時計や、科学館のプラネタリウムの建物などを見た時に、みんなが共有している物語があるということかと思います。多くの応募作から、そうした物語が浮かび上がってきたことが、この公募事業の一つの意義かもしれないなと考えながら選考しました。私個人にとっても、貴重な機会となりました。ありがとうございました。

中日新聞文化芸能部デスク。１９７４年、名古屋市生まれ。１９９８年、中日新聞社入社。北陸本社整理部、長野支局などをへて、２００８年から東京本社文化部。１７年から名古屋本社文化部（現・文化芸能部）。１８年から現職。主な取材ジャンルは、文芸や出版、美術など。哲学者・鷲田清一さんらのエッセイ連載「時のおもり」や、漫画「喫茶アネモネ」の編集を担当。

中村陽子　Yoko Nakamura
/新聞記者・文化担当デスク

写真提供

宮田雄平　Yuhei Miyata
/フォトグラファー

名古屋市在住。名古屋ビジュアルアーツ専門学校 写真学科を卒業後にフリーランスのカメラマンとなる。雑誌や書籍、広告、ライヴやイベントなどの撮影を行いながら、ライフワークであるスナップ撮影やワークショップの講師を行う。写真撮影と街撮りコラムを執筆した「ナゴヤ愛 地元民も知らないスゴイ魅力」（秀和システム・刊）を出版。

金賞

未来の会話

霜月彩華

ぱら、と息子の教科書のページをめくる。そこに懐かしい写真を見つけ、思わず隣りの友の肩を叩いた。

「見てよ、これ。『金時計』だ!」

「……ただの時計に見えますが、有名なのですか?」

僕にとっては青春の代名詞——というのは言い過ぎだが、様々な記憶が呼び起こされる、思い出の時計だ。だが残念なことに、当時を知らない彼の共感は得られなかった。

「わかってないなぁ。この時計はね、名古屋駅の定番待ち合わせスポットなの。遊びに行く人達で毎日溢れてて、すごく活気があったんだから!」

金に塗られた背の高いアナログ時計。長いエスカレーターを背景に、多くの人が行き交う。

そんな色鮮やかな写真だ。当時の光景が目に浮かぶ様で、最近の教科書はすごいな、と素直に感心する。

「そこまで熱く語るなんて、何かあったのですか?」

「何かって言う程じゃないけど、色々あったよ。一番大きいのだと——」

明日の10時に金時計集合な! と友人と約束したものの、うっかり場所を間違えた、とか。

「当時名古屋に住んでいて、しかも有名な時計だったのに、間違えたのですか?」

「いやー、駅の反対側に『銀時計』があって、そっちと聞き間違えたんだよ。丁度、新幹線を使う予定だったし」

銀時計は、新幹線乗り場の目の前だ。正直、口約束だったので僕ではなく相手が間違えた可能性もあるが。

「成る程。ところで、この写真では全員がマスクを着用していますが、2020年代でしょうか?」

「あぁ、コロナの時だね。何でこれが社会の教科書に載ってるのかと思ってたけど、そういうことか」

あの時は大変だった。マスクに手指消毒、外出自粛、その他諸々。

「二度と経験したくない、と聞きます。私達も気を付けなければいけませんね。」

「そうだけど、でもさ——」

笑顔を作る友に、続きを告げるべきか迷ったが。

「次があったとしても、君は大丈夫じゃないか。ロボットなんだから」

銀賞

幻のアゲハ

もりくりす

「由紀、まだ暑いけど空はもう秋だね。」

玄関ホールを出て、真っ青な空を仰ぎながら妻に言った。長者町から護国神社の前を通って名古屋城の東側から名城公園の中を反時計回りに1周して帰ってくる。それが私たち夫婦の朝の日課だ。

長者町は昭和の繊維街だ。北の歴史と伝統、西の庶民的抜け目なさ、東と南の現代的息吹の狭間にあって、雑多なエネルギーをふつふつと発している。朽ちていくことを断固として拒み、新しい思考と器によって再生を繰り返す。大きな人口を抱え狭い国土しか持たない日本が続ける生存のための闘いのミニチュア版だ。

石油ショック後、繊維から金型へと商売替えした後も、私は新旧東西が混在、共存するこの街に留まった。橦木町に建てた家に息子夫婦が移り住んだとき、長者町の生家はマンションに建て替え最上階を自宅とした。

散歩道脇に植わっているヤブカラシでは蝶や蜂が採餌している。

「今年の夏はアオスジアゲハが多いね。自然界の青ってなんか特別な感じがする。」

青は由紀の一番好きな色だ。青いアゲハが2頭、くるくると回りながら空高く舞い上がっていく。草木や鳥たちのことを話す5キロの道程はあっという間だ。

やっとゆっくり一緒に過ごす時間が取れるようになった。経済の荒波に揉まれる小舟の船長のわがままに本当によく付き合ってくれたと思う。還暦を迎えたとき、

「ありのままの自分で残りの人生を過ごすの」

と言って白髪を染めることを止めた由紀の髪はプラチナ色だ。

帰り道、再び護国神社の前を通ると、緋色の袴を着けた巫女さんたちが正門前を竹箒で掃いている。外堀通りを渡りマンションの前に着く。玄関ホールに入るときに由紀が段差に躓いた。私は咄嗟に支えようと手を差し伸べた。私の手はいるはずの由紀の体を突き抜けて空を切った。

もっとここに居たいような、星になった由紀の元へ早く行きたいようなアンビバレンスに目を閉じた。

銀賞

鶴舞公園、いいとこだよな

しば福

うん、鶴舞公園いいよね。
名古屋には230万人も人が住んでるらしいけど、公園や緑地が多くて最高だと思うね。
尾張名古屋は城でもつって言うからな。
名古屋城の金鯱が眺められる名城公園もいい。
平和公園まで行ったこともあるけど、東山公園へ続く森も俺は好き。
でもやっぱり鶴舞公園だな。
ホームタウンって言うの？
生まれ育った場所だから、小さい頃からいいとこいっぱい知ってるしね。
鶴舞公園と言えば花だな。
俺は花に詳しいよ。
まず春はサクラ。
「日本さくら名所100選」に選ばれてるらしい。
噴水塔の近くが桜林になっていて、ライトアップで夜桜見物もできる。
俺は寝るのが早いから見たことないけどな。
初夏にはバラ。
バラ園一帯いい香りで大賑わいだ。
夏が来たら胡蝶ケ池のハス。
俺は早起きだからゆっくり花弁が開き始めるところから見てる。
秋はイチョウやモミジもきれいだけど、クヌギやアベマキのでかい木が一押しだ。
秋まつりはいい。
冬は鶴々亭横のサザンカ、ツバキ。
それからイルミネーションな。
クリスマスには人が集まる。
な、鶴舞公園っていいとこいっぱいだろ。
もっとよく知りたい？
いいよ、おまえのこと気に入ったから教えてやる。
春は花見客の残した弁当がいい。
ご飯粒が当たりだね。
腹一杯になったらデザートに桜の蜜だ。
萼筒（がくつつ）からうまくちぎって飲むんだぞ。
バラは羽虫で大賑わい。
夏は虫が増えてごちそうだらけだ。
噴水塔もいい。
暑くなったら噴水の水を飲んで水浴びして、かゆくなったら植え替え中の柔らかい土で砂浴びだ。
秋はどんぐり、スダジイがうまい。
俺らはかわいいとこあるから、秋まつり会場でちょいと愛敬振りまけばパン屑が飛んでくる。
冬はクリスマスチキン。
なんだよ、その顔。
チキンが何でできてるとか知らねえよ。
な、鶴舞公園って最高だろ。
ちゅんちゅん、ちゅんちゅん。

佳作

待ち人来たらず

水玉猫

あと5分。7時10分まで待ってみよう。
短気は損気っていうじゃないか。既に55分待ったんだ。あと5分待てなくてどうする。
約束した時間は6時半。待ち合わせ場所に着いたのが、その20分前だった。それだけ、今夜は重要案件というわけだ。緊張のあまり、スマホは会社に忘れてきてしまった。
ついに人混みに彼女を見つけ、安堵と共に手を振った。だけど、彼女はぼくの前を素通りして行く。人違いだった。
ポケットの中の小箱を握りしめ、ぼくは銀の時計に背を向けて足早に歩き始めた。
名古屋駅の待ち合わせ場所といえば、銀の時計と金の時計だ。銀の時計は中央コンコースの太閤通口側、金の時計は反対側の桜通口側にある。コンコースの端と端で向かい合う二つの時計は、まるで、ぼくと彼女のようだった。だから、今夜は銀の時計で待ち合わせて、金の時計に向かって二人で歩き、コンコースの真ん中に来たらプロポーズするつもりでいた。でも、縁がなかったんだ。幼馴染で長い付き合いだったけれど。
「もう、名古屋時間なんだから！」夕方の雑踏の中、彼女がコンコースを駆けて来る。「名駅の時計と言ったから、ずっと金時計の前で待っていたのに。もうすぐ7時15分だよ」
彼女は金時計の方を指差し、ぼくは驚きながら答えた。「いや、銀時計だよ」
「えっ？待ち合わせって言ったら、金時計でしょ」彼女はそう言ってから、笑い出した。
「わかった、悪友たちと太閤通口の居酒屋に行く待ち合わせに使っているから、銀時計なんだ。これからは、ちゃんと金か銀か言ってよね」
「プラチナだよ」
今度は、彼女が驚く番だった。
今、二人がいる場所はコンコースの真ん中の券売機だ。
ぼくは、人生のレールを走る結婚という名の列車の切符を買うために、ポケットからプラチナの指輪の入った小箱を取り出した。

佳作

金時計の怪鳥

さくら木洋介

名古屋駅。地下鉄から在来線に向かう途中に金色のモニュメント時計がある。待ち合わせ場所に使われるためか、金時計の周囲には待ち人が集まっている。俺もその待ち人の一人だ。

待ち時間をつぶすため、ぼんやりと周りを眺めていたがある一点を見てぎょっとした。いつのまにか金時計の上に奇妙な鳥がとまっているのである。

鳥は茶色いフラミンゴにトサカが生えたような外見で、窓から差し込む光を浴びて黄金色に輝いて見える。こんなにも目立つ外見をしているのに、鳥に気づいている者はいない。鳥は周囲をゆっくりと見まわして、俺と目が合った。

「小僧、我の姿が見えるのか?」

不意に俺に向けられた声。慌てて周囲を見渡すが、俺に声をかけた人物はいない。鳥に視線を動かすと、まだ俺の方を見ている。

「聞こえているのだろう、我の姿が見えるのか?」

やはり俺に声をかけているのは鳥のようだ。鳥の表情というものは分からないが、怒らせてはマズいと思い何度か大きくうなずいた。

「ふむ、見えておるのか。小僧は運が良い。我は久方ぶりに下界にやってきた。この地は我を崇めている者が多く、我の形をした南蛮菓子があるくらいだ。小僧も知っているだろう?」

鳥はご機嫌な様子で流暢に話し出した。一方の俺は鳥に話しかけられたという衝撃もあり、混乱気味だ。俺がそのまま何も言わずにいる様子を見て、鳥は首を傾げた。

「……もしや知らぬか。ま、まぁ人の世は流行り廃りが早いからな……。そうか、知らぬか……」

鳥は寂しそうにつぶやくと、両翼を広げた。金時計からふわりと降り、出口に向かって飛んでいく。通り行く人の頭上をゆっくりと滑空していくが、誰も鳥に気づかない。

やがて鳥は見えなくなったが、俺はその場から動けなかった。しばらくして、友人がケーキ箱を持ってやってきた。

「お待たせ。久しぶりにあの店行ったけど、もう売ってないんだな、しゃちぼん。」

入選

彼女と歩くのは

麻倉トコ

「私、歩くの好きだから」

そう言う彼女は、実際によく歩く人だった。三十分かかる名古屋駅までの道のりをいつも楽しそうに歩いて、僕もそれによく付き合わされた。途中にあるファミリーマートで、夏にはアイス、冬には肉まんをジャンケンして勝った方が二人分買うルールだった。

だけど、今日はファミリーマートが見えても二人、何も言わず、素通りする。僕の横を歩く彼女はいつも通り楽しそうで、僕は、これが最後だなんて信じられなかった。

「東京の大学に行くから」

だから、ごめんね。そう告げた彼女の目には迷いがなくて、僕の入る隙間はもう残されていないのだとその時初めて悟った。

いつから、どうして、そんな言葉は声にならずに飲み込んで、僕は結局「わかった」とだけ小さく呟いた。

スーツケースをひく彼女はいつもと同じ歩幅で歩く。僕が歩くペースを彼女にあわせるのは、これで最後になる。

やがて駅に着いて時計台の前で彼女が立ち止まった。

「圭ちゃん、ここまでいいよ」

振り返ってそういう彼女に僕はなんと返せばいいのか分からなくて、黙りこんだ。

これで、最後。

彼女とはもう会わない。

なら、最後の言葉は、

「「ありがとうね」」

声が重なって、二人で顔を見合せた。それから同時に吹き出して笑う。

笑いながら、涙を滲ませた彼女の顔を、僕は生涯忘れないだろうとなぜだかそう思った。

ありがとう、さよなら。

小さくなっていく彼女の背中が、少しだけ滲んでゆれた。

入選

手羽先と渋滞

七寒六温

この道は、主要道路の1 つなため車が多い。だいたいいつ来ても、渋滞している。

この渋滞にイライラしている人間もいる。遅刻しそうだからか、なかなか車が進まないからか、それとも早くトイレに行きたいからか……

僕は、名古屋に住んで7 年だが、渋滞でイライラしたことはない。むしろ、渋滞を楽しめている。

僕は、人間でありながら手羽先マンでもあるため、両手に手羽先を持つことで、自由に空を飛ぶことができる。だから、道の混み具合に左右されることがないのだ。

えっ？　どうすれば手羽先マンになれるかって？

それは、僕のように心の底から手羽先を愛し、手羽先に感謝し、手羽先を思う存分楽しむ事と、人に優しくなる事……

これができたら、自然と手羽先マンになっているよ。

あ、そうそう……

渋滞くらいで、イライラしている人は手羽先マンにはなれないな―。

人に優しくならないと……

もちろん、自分自身にもね。

入選

雨宿りの日

水色のうさぎ

「ママー！パパー！はやくー！」

息子が飛び跳ねながら呼んでいる。

お目当てはこどもの広場にある山の砦の頂上のローラー滑り台だ。

「元気ね」

「ほんとにね」僕と妻はふふと微笑んだ。

妻と初めて出会ったのもこの場所だった。

桜が風に舞い散る中、鶴舞駅へ向かう高校生の僕と彼女。桜の薄いピンク色の景色の中を歩く彼女の姿は夢の中のように綺麗だった。

勇気を出して声をかけたのは雨の日だった。

傘を持っていなかったらしい彼女は駅の前で雨宿りをしていた。

気の利いたセリフなんて言えなかった。僕はなるべく自然な感じに、「雨、止まないですね」と言い、「そうですね」と彼女が答えると、「家の近くまで送りましょうか？」と聞いた。

彼女は笑って「ありがとう。さっき電話したから親が迎えに来てくれるの」と。僕は今にも崩れて砂になりそうだったけれど、なんとか笑顔を保って、「それは良かった」とか細い声で言った。

「でも……」彼女は続けて言う。「親が迎えに来るまで図書館で本が読みたいな。一緒に行こう？」と僕の顔を見て笑って聞いた。

彼女のまんまるな目に見つめられて、僕は変な声で返事をした。

それから、学校帰りに図書館で会うことが増えた。公園で話し込む日も。

あれから季節は何度も巡ってきた。

僕たちは噴水の前をゆっくり歩く。その少し前を息子が弾みながら、幼稚園で覚えたばかりの歌を歌いながら歩く。

「ねえ、覚えてる？」妻が聞いた。

「ん？」

「高校生の頃。あなたが私に声をかけた日」

「ああ、急に雨が降って、傘を持ってなかった彩ちゃんが駅で雨宿りしてたんだよね。覚えてるよ。チャンスだと思ったんだ」

僕がそう言うと、妻はくすくす笑い出した。

「本当はね、私あの時、折りたたみの傘持ってたの」いたずらっ子の顔で妻が笑う。

「じゃあなんで……」

「いつも私を見てるあなたが、声をかけてくれるんじゃないかな？と思って」

入選

金時計ダッシュ

百

「ありがと！さよなら！」
くるっと背を向け、涙の金時計ダッシュ。
可愛くおしゃれをして健気に振られに行ったあたし17 才の金時計ダッシュ。ゴールは銀時計。今思えば完璧すぎる。涙をこらえ、振り返らずに思いっきり走った。彼の1 番になれなかったあたしは2 番がお似合い。少し言い過ぎか。
それでも名古屋の代表的な待ち合わせ場所を、わざわざ失恋現場に選んだ過去のあたしをちょっと恨みたい。ここに来るたびに思い出さずにはいられないんだから……
でも今日はちょっと違う。
金時計を見ると約束の時間を少し過ぎていた。大学に入ってからあたしがちょっと気になっている律くんとの約束だ。目線を前に戻すとあたしの方に息を切らして走ってくる彼がいた。
「はぁ……ごめん、俺待ち合わせ場所間違えてた」
「いいよ、どこで待ってたの?」
「銀時計」
あたしは思わず頬が緩んだ。銀時計ダッシュじゃんと心の中でツッコミを入れた。息を切らしてる彼が私のために、一直線に走って来たのを想像すると、嬉しいような恥ずかしような気持ちになった。もしかして銀時計でうずくまっていたあの頃のあたしからバトンを受け取ってくれたのかな。
「ねえ律くん、1 番の金メダルあげる」

入選

宇宙人、侵略

クサカベ アキラ

「うわ！あれ！」
助手席に座った僕の声は車の中に爆発のような衝撃を残して、車内に流れる音楽に流されていく。
それからあっと思って両手で口を塞いだ。
窓の外を見ると、隣の車も道歩く人も、いつもと変わらない顔をしている。
「びっくりした! 渋滞で退屈そうにしてると思ったら急におっきな声だして、どしたのもう」
お母さんはちらとこちらに目をやって、すぐ前を向いた。車は少しずつ前へ進んでいく。
高い建物に囲まれた広い一本道の奥でどっしりと構え、奇妙な雰囲気とピリリとした緊張感を醸し出している謎の銀色の球体に向かって、進んでいく。
「……前に本で見た。銀色、あれ絶対宇宙船だ。宇宙人が攻めてきたんだ……ってちょっと、お母さん!」
宇宙人は僕達と違って耳が良いかもしれない。宇宙人にバレないよう小声で話す。
「なに、トイレ?」
「しーっ! 違うよ!」
人差し指を立て、いつもの声の大きさで喋るお母さんを注意した。宇宙人が来てるのに、お母さんも窓の外も、普段通りに過ごしている人だらけで訳が分からなくなった。
「なんで宇宙船が来てるのにみんな平気なの!」
もう一度宇宙船を見ると、それはいつの間にか目の前まで迫っていた。
いつしか渋滞を抜けていたようで、車は凄い速度で道路を移動している。
「ちょちょちょちょっと! ……お母さん!」
思わず声を上げそうになったけれど、なんとか抑えて静かに語りかける。
しかしお母さんは運転に集中していて、全く取り合おうとしてくれない。
「もうなに? もうすぐ名古屋市科学館着くから。ほら、目の前」
お母さんはさっきと同じいつもの声の大きさでそう言って、当たり前のように宇宙船を指さした。
さっきからずっと、変だと思っていた。まるで、僕以外の全員が以前から宇宙人の存在を知っているかのような違和感。まさか。
「みんな、宇宙人だったのか……!」

入選

時計のところで

白井彩子

「JR 口の、金の時計のあるところ、分かる？」
彼女は言った。
「分かるよ。」学生時代、何度かそこで人と待ち合わせをした。
「じゃ、12 時に時計のところで」
久々に名古屋に出かけることになり、名駅の近くで仕事をしている彼女に電話をかけた。
正午の時計の広場は、思った以上に賑わっていた。時計の周りには幾重にも人がいる。秒針のように回り続けるエレベーターは刻々と人の集団を更新していく。
学生時代、初めて仲間と待ち合わせたとき、果たして誰か来ているのかと少々の不安を抱きながら、どこかワクワクして探した。そして、互いを見つけた時、少しばかり感動した。
彼女なら、どこに立っているだろう。時計の針はまだ12 時を指していない。彼女はまだ来ていないかもしれない。
彼女と出会ったのは高校２年の時。クラスの中で、ひときわ明るい存在で、いつも周りに人がいた。「友達になろう」と声をかけたのは私。「交換日記しない？」と言い出したのは彼女だった。交換日記なんて、当時からしてもひとつ前の時代のものに思えたが、それは卒業の日まで続いた。
コンコースを行き交う人は、田舎から出てきた人間よりも先の季節を歩いている。急ぎ足で歩いた背中はうっすら汗ばんでいるというのに、人々はもう秋の気配を纏っている。
彼女は何色を着ているだろう。二百万都市の真ん中で、知っている骨ばった頬を探す。懐かしい目と一致する目を、一瞬ずつ一人一人の顔の中に当てはめながら、だんだん中心へと進む。
親友の名を呼ぼうとした瞬間、その目が私を見て笑った。

入選

噴水塔の下で

佳加

鶴舞公園で天使に出会った。
丸い目が特徴の可愛い女の子。
「キミは、どうして、ここに、いるの」天使は僕、堀内俊太に優しく、辿々しく問いかけた。
別に特別な理由なんてない。たまたまだ。名古屋に生まれて、転校とかなく成長してそのまま。なんか、ゆらゆらしたまま、ずっとここにいる。
家族、子どもの時からの友人、彼女がいるから？人が大切なら、その人達全員を連れて名古屋を離れれば良いだけのこと。
それは、違う気がする。いや、絶対に違う。
なんだろうな、高校の時は最先端の東京に憧れていて、大学は行きたい学部のために兵庫に行って。
でも、今はなぜか名古屋にいる。
なんでだろうな、考えたことなかった。
「わからない」と呟くと、天使は「案外、単純なことかもしれませんよ」と小さな声で囁いた。
周りを見渡す。人が疎らにいる公園。レトロな噴水塔。いきなり現れた天使。東京にも兵庫にもなくて、小さい時からここで生きていて、僕の故郷だ。
「わかった、名古屋が好きなんだと思う」
それが正解か間違いかわからないけど、確かな真実である。
もう、僕は天使を見れない。
たまに鶴舞公園に彼女の影を探すけど、そんなもの微塵もない。
ただ、いつもの何気ない風景を見る目が変わった。大切な気色に変わった。
「名古屋が好き」そう思うだけで、少し恥ずかしくて、誇らしくて、愛おしい。
あの天使はきっと今日も誰かの隣にいる。
「どうして、ここに、いるの」と難しい質問を投げかけて大切なものを見つけさせる手伝いをする。
噴水塔の水が吹き上がった。子どもたちが 走り出した。今日も僕は名古屋で、生きていく。

入選

美術の宿題やってねえ！

浅葱

「美術の宿題、やってねえ！」
「４つの公園まわって風景画描いて提出だろ」
今日は８月３１日。午後１２時。
これから４つの公園をまわって風景画描いて提出とか無理無理無理！
「そもそも美術なんかの宿題だすなよ、ハラセンめ！」
「アキラ、俺にいい考えがある。鶴舞駅にこれから集合だ！」
「ハヤト、助けてくれるのか！？すぐ向かうぜ！」
というわけで、大急ぎで俺は画材を鞄に押し込み鶴舞公園へ向かった。
鶴舞駅の中央柱の前で手をあげているハヤトは手ぶらだった。もしかして、ハヤト、お前もしかして。
「やっぱり２枚お前が描いてくれるのか？心の友よ～！！」
「心の友には違いないが、手伝いはしない。俺は抜け穴を教えてやるだけだ」
ハヤトは腕を組んで得意げに笑った。抜け穴……？
「鶴舞公園で４枚描いたのお前」
「当然だろ、鶴舞公園は無料な上に四季折々の自然が楽しめるんだぜ」
鶴舞公園中心に鎮座する宮殿の前で大きく手を広げたハヤトに俺は納得した。天才だと思った。
「庭園も薔薇道も池も山道もあるしいけるんじゃね？」
「天才かよ、お前」
さあ、描こう。俺はベンチに座ってまず画材を取り出しつつ、宮殿を描き始めた。
「いい感じじゃん、アキラ」
「これならすぐ終わるぜ」
いい天気、筆が進むぜ。
「何を描いているんだね」
「わっ」
振り返ると、白い帽子にサングラスのおっさんが急に話しかけてきた。
「宮殿です。美術の宿題で」
おっさんは口元に笑顔を受けべてうんうんと頷いたあと、返事の代わりに俺たちにげんこつを飛ばしてきた。
「いでええ！」
「はああ！？」
「８月３１日に焦るお前らみたいなヤツらがいるんじゃないかと思ってな。ちなみに宮殿じゃない。奏楽堂だ、そこに看板あるだろう」
サングラスと帽子をとった美術顧問現担任のハラセンは勝ち誇ったように笑った。
鶴舞公園、先生にも信頼されてるんかーい。

入選

繕う時間

三毛三子

さすが口コミ高評価のパン……！！
パンのおいしさに感動はしているが、それとこれとは別で心は荒んでいる。
理由は単純明快、大事な人と喧嘩をしたからだ。
なんとなく家にいたくなくて、どこかに行きたくて。
おいしいものを食べて気分転換をしようとここに来た。
ここは穏やかな時間が流れている。
噴水塔、公会堂、少し歴史を感じる情緒ある建物があり、運動をしたりゲームをしたりという活気にあふれた人がいる。それを包み込む木々と水。
今の私のように陰鬱とした人もいるのかもしれないが、はたから見る分にはなにも分からない。
目をつぶり、一度シャットダウン。
枝葉のさざめき、鳥の鳴き声、そういうもので自分を満たす。
少し遠くの喧騒に耳を澄ませ、目の前を走り去る子供の足音に目を開ける。
帰ろう。雨のにおいがする。
荒んだ心は澄んだ空気と流れる水でなんとなくなめらかに削られた気がする。
一人では食べきれなかったたくさんのおいしいパンを、温かいコーヒーとともに一緒に食べたい。
そして、おいしいねと感想を言い合いたい。
それで削られた分の心がきっと補填できる。
次は一緒に来よう、そう一人で勝手に決意し噴水に背を向けた。

入選

直進

村田選手

物件の見学に行った帰りの車の中で、ミサトが言った。私はあれと喋ったことがある。と、まっすぐ遠くを指さしながら。
誰にも言ってないんだけどね。小学二年生の家族旅行の時で、私は後部座席に乗ってて、姉は隣でぐっすり寝ていて、私は窓を開けて顔を出してた。すると、あれがこっちをじっと見てきて、私は何でこっちをじっと見てるの？ って心の中で呟いたの。そしたら、「見てないし。」って言うわけ。いや、直接言ってきたわけじゃなくてテレパシーみたいな。嘘、なにこれ。って言ったら、「シー、声を出すなよ」って。それでね、まっすぐあれに近づいてったの、父の運転する車が。それで、私たちの家族旅行先っていうのがあれの中だったってわけ。私は旅行だって言うのに行き先を知らなくて。うん、そしたら「僕の内側はけっこうすごいぞ」って。私が、外は？ってきいたの。そしたら「外側なんてただの銀の丸だろ。名前もないし、すごいことなんて何もないんだ。僕にはなんにもない。」急にしゅん、とした声になるから私はびっくりしてどうにか励まそうとして、じゃあ、名前つけてあげるよ。ピン太郎は？ 頭をフル回転させて思い浮かんだのがピン太郎だった。「ピン太郎？だっさー、笑っちゃうね。」そう言いながら、ピン太郎は笑った。ずっとくすくす笑ってて、それから小さな声でありがとうって。
また、ピン太郎と喋りたいんだけどそのままま っすぐ進んでくれない？
ミサトが言った。
僕は頷いて指示器を消した。

入選

「色のある街」

鈴木龍太郎

「名古屋の街ってどことなく金色だよな」
金時計前で待ち合わせていた友人は会うなりそう言ってきた。
彼曰く名古屋城はもちろんの事、ここ名古屋駅も「金色」のエリアだという。
「それは単にシャチホコなり時計なりが金色だからじゃないのか」
「いや、さっき待ち合わせの確認用で送った画像あったろ。あれ見てみろよ」
言われた通りさっき送られてきたメッセージアプリの画像を見返すと、全体が確かにシャンパンゴールドのような色合いにも見えてくる。不思議なことに時計はその中にあってあまり存在を主張していない。
「まあ分からんでもないな」
「だろ？無事主張が通ったところでそろそろ行こうぜ」
彼が出口に向かって歩き出したのを追いながらさっきの画像を反芻する。
確かにこの金時計の辺りは金色っぽく見える、他の場所はどうだろうか。
大須は観音様とアーケードの感じから赤色、今池だったらは何となく黄色のような感じがする。
決して各色が主張するような派手さは無いにしてもそこはかとないオーラのような「色」が出ているのが名古屋なのだろうなあ、などと想像するのも悪くはない。
駅から出るとずいぶんと夜風が冷えていた。もうすぐ秋も終わって冬になるが、街ごとの色はおそらく変わらないだろう。そう考えながら「金色」の駅を後にした。次はどこの色のある街に行けるだろうか。

入選

わたしと宇宙のはなし

いぬちゃん

クーラーが効いた車の中、後部座席の窓から夏の日差しが真っ直ぐに入り込んでくる。今日はいい天気だ。私は大好きな科学館に行けることが嬉しくて、小学校で作った星座早見盤を持ちながら足をバタつかせていた。車を科学館近くのパーキングに停めた後、私はお父さんと手をつないで、遠くに輝く銀色のドームを目指して白川公園を歩いていく。私は今からあの中に入って、たくさんの星を見るのだ。汗だくになりながら科学館に入って、極寒の部屋で涼み、いろんな物の匂いをかぐことができるコーナで遊んだあと、いよいよ楽しみにしていたプラネタリウムに入った。プラネタリウムが始まると、頭上に星たちがつぎつぎに現れて、キラキラと輝いている。星が増えるたびにどんどんと吸い込まれていき、自分が宇宙にいるような気分になった。

ふわふわした気持ちのままで車に乗りこみ、後部座席であお向けになりながら、お父さんと今日教えてもらった星座の話をした。「デネブはおならで覚えるんだよ。デネぶー！おならぶー！」お父さんは苦笑していたが、私が話すことをずっと楽しそうに聞いてくれていた。

ふと、窓の外を見ると栄の街灯がキラキラと輝いていた。車が進むたびに光がビューンビューンと線になって、自分がロケットに乗っているような気がした。私たちは宇宙飛行士で、お父さんと一緒にどこまでも続く宇宙を旅した。ときには新しい星をみつけたし、ときには宇宙人と握手をした。そして、宇宙の先には…

「ついたよ」お父さんが運転席から声をかけてきた。眠い目を擦りながら起き上がると、もう車は家の前に停まっていて、長いようで短い宇宙の旅は終わったようだった。車から降りて、顔を上げると、夜空に星たちがキラキラと輝いていた。今はまだ見上げることしかできないけど、いつかこの夜空を飛び越えて、本当の宇宙に行けるといいな。

入選

先輩止まってください！

上石貴仁

「先輩止まってください！何か巨大な球体のようなものがあります！」

入江正義は、この春名古屋に引っ越してきた社会人一年目の新人である。

正義の勤める会社は、名古屋の魅力を世界に発信することを目的としており、今回県外から名古屋の魅力を発信することを条件に募集したところ、正義が採用されたのだ。

今日は、先輩で上司の荻原卓也が正義を乗せて、案内を始めたところだった。

その矢先、正義が思わず叫んだのだ。

この道は、長島町通りといって、清州城が名古屋城を築城する際に、使われていた町名であったとされている。現在は、オフィスやビジネスホテルなどが立ち並ぶ中心的位置となっている。

正義は、以前観光で名古屋を訪れただけで、「ひつまぶし」や「みそかつ」などのグルメがすぐに思いついたが、他にも何かあるだろうと考えていた。

「正義君、何を考えているんだい？もしかして、お腹すいてきたのかい？」

卓也からの言葉に図星を指されてしまった正義は、顔が赤くなった。

思わず「どこかに美味しいお店はありませんか？」と言いたいところをグッと抑えて黙った。

「この球体は何ですか？」と、先ほど言ったことをもう一度卓也に尋ねた。

「ああ、それは科学館だよ」と答えてくれた。

それは、名古屋市科学館と呼ばれて、『みて、ふれて、たしかめて』をテーマに建てられた科学館である。一番の目玉は、直径三五メートルのドームであり、プラネタリウムを投影するための空間で、特徴的な形である。それはまるで、ロボットを連想させるような雰囲気が突然一面に広がるようだった。

「あんなのが気になるのか？」

相づちのような問いかけの卓也に正義は、

「是非とも行って、この科学館の魅力を発信したいです！」

と力強く言った。

正義の訴えかけるような目に、卓也は妙にドヤ顔で応えた。

(終)

入選

駅の時計で待ち合わせ

夏暮 コマ

「12時に名駅の時計で待ち合わせね」
今日私は友達と名駅近くのアニメイトに行く約束をしている。アニメイト近くの時計だから、銀時計に集合ってことは伝わるはず。集合時間の5分前に到着し、何を買おうか考えながら友達を待つことにした。
しかし待ち合わせ時間になっても彼女は来ない。事故にあったのか、それとも電車が遅延しているのか。不安になって彼女にメッセージを送った。
「ねぇ、今どこにいるの?」
すると「どこって名駅の時計だけど…」と返信が来た。そのメッセージを確認して辺りを見渡す。銀時計周辺には待ち合わせしている人がいるが、友達の姿はどこにも見当たらない。
「どこにいるか写真送って」
流石に位置が分かれば見つけられるはず。そう思ってメッセージを送信した。数分後、友達から送られてきた写真を見て私は思わず笑ってしまった。
「時計って、こっちかぁ〜…」

入選

亡き夫に感謝

加藤淑翠

昭和９年６月３日、なごやに生まれ、育ち、この東山の地をこよなく愛し、山あり、谷ありの人生をやり終えた夫が、昨年１１月３０日、８６歳の生涯を綴(と)じた。幼き頃に、両親を亡くし、自らを奮い立たせ、建築家をめざし、映画と青春しながら努力を重ね、２９歳の秋１級建築士を取得した。この頃は既に名古屋市の職員で、建築局に籍を置き仕事をしていた。夫の手の跡は、今も名古屋市中に残っている。その１つ鶴舞公園内にある緑化センター。この建物の設計は、市職員のみにあらず、一般への公募もあり、その中から夫の作品が選ばれて、今の建物がある。他には東山動物園内のキリン舎、名東区役所。天白図書館、他色々あり。鶴舞公園へは夫と共に何度も訪れている。時には孫と句を作りに出向き、一句。

たま煎を　鳩と分け合う　花見かな　　淑翠

岡崎の片田舎に育ち、なごやに憧れ、高校生の頃、ベストセラー小説、原田康子の『挽歌』を読んで建築家に憧れ、将来結婚するなら建築家と決めていた私。その願いが叶って、夫と結ばれ、２人の子に恵まれ、夫と子に育ててもらい乍(なが)ら、地域の皆さんに育ててもらい、生け花の師範資格を取得。ボーイスカウトへの奉仕、保護司、人権擁護委員を熟(こな)してきた。昨年春己(おのれ)の７８歳の人生を１冊に。「思ひ草」を出版した。北海道から九州までの友人に、４００冊を送り届けた。その間８年の月日が流れていた。完成の折夫からの一言「淑子よく頑張ったなあ」今は夫亡き後終活を始めている。夫と共になごやの地で過ごせた人生は尊く大勢の人達のお世話になった今までに感謝！私を嫁にしてくれてありがとう！大好きななごや、ありがとう！　合掌

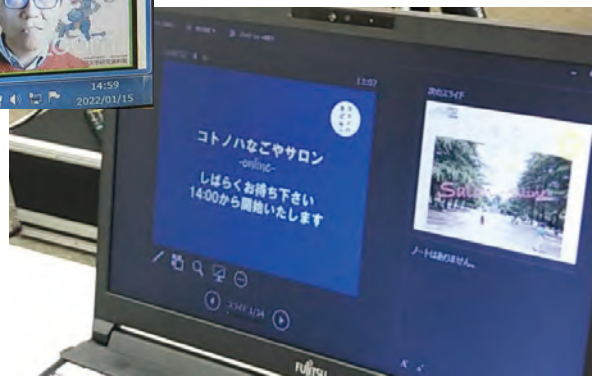
最終選考会

愛知淑徳大学有志の皆さんの
一次選考結果を受け、選ばれた
入選２０作品をもとに実施。

今年はオンラインにて、選考委員
の先生方に入賞５作品の決定を
していただきました。

コトノハなごやサロン―オンライン―

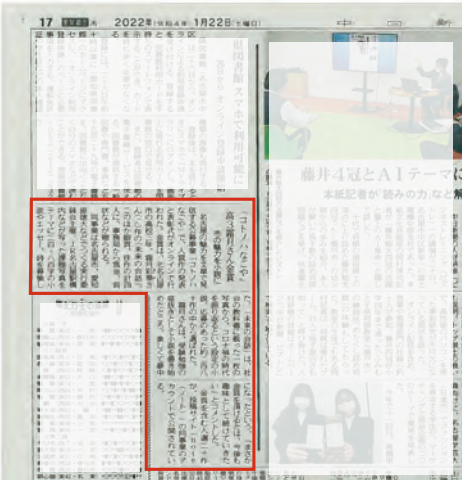
サロンもオンラインで実施し、司会
の神田沙織さん、選考委員の先生方で
なごやかに進行しました。



入賞５作品の発表、賞状の授与
（読み上げ）、コトノハなごや恒
例の先生方による入選作品へ
の講評トークを配信しました。
（当日視聴数；１３１）

メディア掲載・広報普及活動

中日新聞2021.8

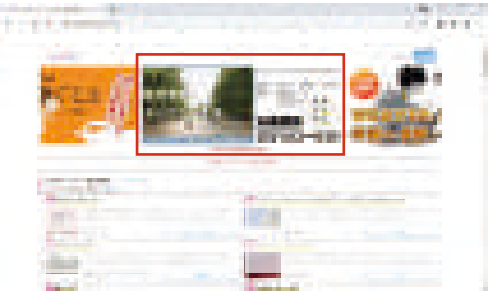


中日新聞2022.1

中日新聞ウェブ版2021.8

文芸による名古屋の魅力推進事業
「コトノハなごや」2021作品募集

「公募ガイド」作品募集広報ページ



「ステキブンゲイ」サイト トップページバナー

●他　（ウェブ媒体）docomoニュース2021.8　　公募ストック2021.8　　登竜門2021.8
（ラジオ）FM AICHI 2021.9　　（チラシ）市内施設・図書館、市内協力書店、県内高等学校・大学

制作物

作品募集チラシ（A4カラー・表）

公式ウェブサイト

作品募集チラシ（A4カラー・裏）

1/15サロン開催チラシ（A4カラー）

●作品募集チラシ（A4カラー両面）　●1/15サロン開催チラシ（A4カラー）
●公式ウェブサイト　●一次選考用ドライブ　●公式SNS（note、Twitter、Facebook、Instagram）
●動画（公式YouTube 1/15サロン入賞作品発表と授賞式部分のみ）

開催概要

●事業名称　文芸による名古屋の魅力推進事業　ーコトノハなごやー

●開催期間　２０２１年８月２日（月）～９月３０日（木）

●事業趣旨　なごやの魅力を深堀りする機会をつくり、文芸分野、なごやへの愛着をメディアツールを活用して振興・推進していく。

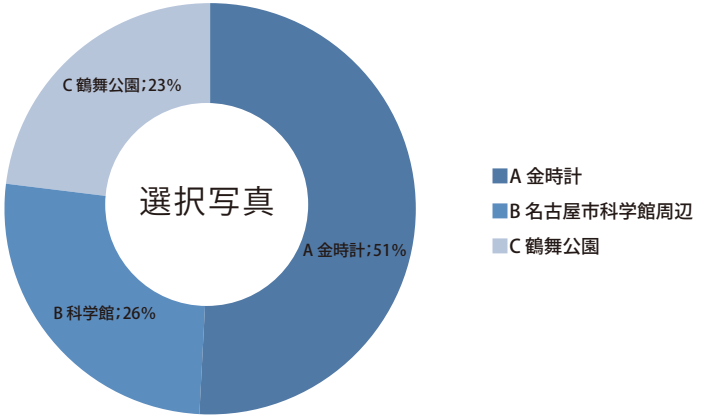
●事業概要　作品募集プログラム（公式サイト利用応募を推奨の作品公募実施）と授賞式、選考委員講評トーク（「コトノハなごやサロン」）、広報普及活動

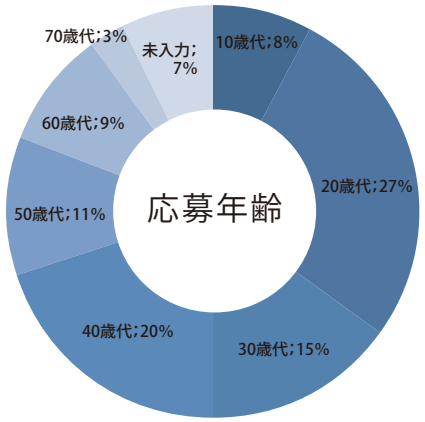
スケジュール

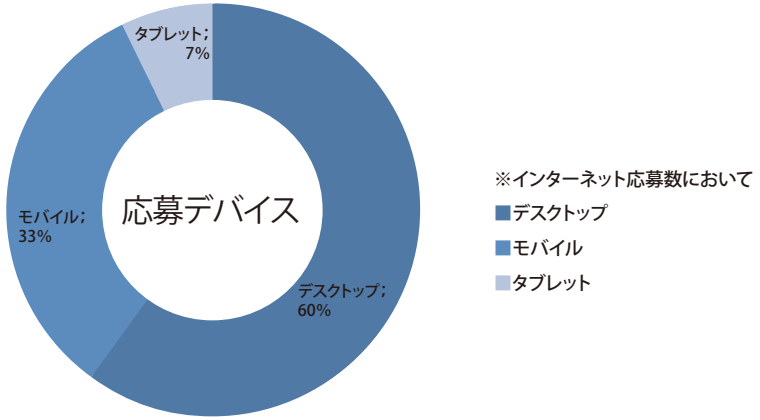
７月	実行委員会発足
	公式ウェブサイト公開、募集告知チラシ配布（市内施設等）
８月	作品受付開始
９月末日	作品受付終了
１０月	一次選考開始（愛知淑徳大学有志による選考）
１１月下旬	一次選考終了、入選２０作品の選出
	選考委員各位による最終選考開始
１２月下旬	公式ウェブサイトにて入選２０作品の発表
	選考委員全員による最終選考会
２０２２年１月	コトノハなごやサロン開催（受賞作品発表および授賞式、選考委員による作品講評トークの配信）
	公式ウェブサイトにて入賞作品の発表
３月	コトノハなごや開催報告発行（入賞５作品および入賞２０作品、広報活動、募集結果データなど掲載）
	実行委員会解散

募集結果データ

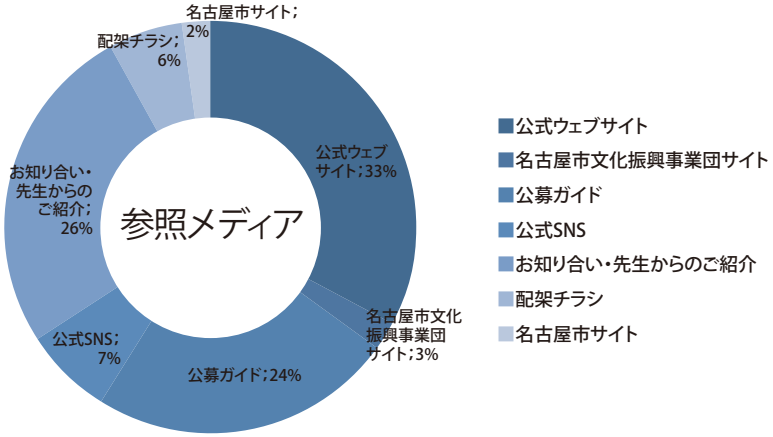
●応募総数　２７９件（郵送１７件）／課題写真３枚
●ユーザー数　2,９８２人







募集結果データ



（参考）
●応募総数
２０１９年度３３６件（郵送　７件）／課題写真　５枚
２０１８年度３５３件（郵送１１件）／課題写真１０枚
２０１７年度１６５件（郵送　３件）／課題写真　５枚

●ユーザー数
２０１９年度／3,３０４人
２０１８年度／3,３３６人
２０１７年度／2,４１６人

ーご協力書店様（５０音順）ー
Carlova360NAGOYA（閉店）
紀伊國屋書店プライムツリー赤池店
紀伊國屋書店mozoワンダーシティ店
紀伊國屋書店名古屋空港店
三省堂書店名古屋本店
七五書店
ジュンク堂書店名古屋店
ジュンク堂書店名古屋栄店
精文館書店中島新町店
ちくさ正文館書店
TOUTEN BOOKSTORE
MARUZEN名古屋本店
MARUZENアスナル金山店
MARUZENヒルズウォーク徳重店

デザイン・広報
名古屋市観光文化交流局文化振興室

2022.3